

歩くことばかり思つて歩く

泉鏡花作

明治四十二年四月

私は歩く時には、少しでも早く目的地へ歩きた  
いといふ心持がして居る。汽車へ乗つても、電車へ  
乗つても、なるべく其間の體の苦痛を紛らさうとし  
て居る。けれども本は讀まないといふのは近眼だか  
らで、電車や汽車の中では眼がチラついて讀み悪い  
のである。それよりも窓から景色でも眺めて居た方  
がました。

景色と言へば、暫らく田舎に居たせみか、道を歩  
いて居ても人間の姿や恰好よりも、景色がよく眼に  
つくし街を歩いても廣告や看板などが氣を引くやう  
になつた。それに今いふ如く近眼だから、女の着物  
などはよく見えない。見るにしても正面に見なけれ  
ばならぬので――横眼が使はれぬので――  
さうつけ／＼と向き直つてまでも見らるべきもの  
でもなし、その代り色の感覺は……取り合せ  
の巧拙とか何とかはよく分る。又歩いて居る途中で、

道端で花でも植ゑたのがあると、それを見るのもなか／＼楽しみだ。けれども色の配合でも道端の花でも、好んで見るのではない。實はなるべく早く行く方が好いのである。一つは私のせつかちの爲だらうと思ふ。

勿論さういふ場合に全然頭腦が無思想な状態にあるといふのではない。例へば歩いて居る時に、ふと女の姿とか、話し振りとかに感じて、それが頭腦に印象されるといふやうな見付けものをするところがある。けれどもそれは偶然ある機會があつて、向うから授けて呉れなければ出来ない。だから私はぶら／＼歩いて材料を見付けようなんて考へはないので、唯向うから持つて来て好い工合に授けて呉れるものが印象されるに過ぎない。そしてそれが完全な思想に纏まることもあれば、いつまで経つても唯印象されたまゝで頭の中に消えないのもある。

それに就て斯ういふ話がある。何でもまだ神樂坂に居る時分のこと、晩飯後何の用があるといふのでもなくぶらりと外に出た。そして御徒町から佐竹

の方へ出ようとすると、角に肴屋がある。その肴屋の前を通ると、店のところで、職人體の男がガヤ／＼しゃべつて居る。いつもなら一寸立ち止つて見るのだつたが、その時はなぜかさつさと通りぬけた。と、四五間も先に行つたと思ふ頃、耳のあたりを掠めて皿が一枚バツと飛んだ、私はゾツとして立ち留つた・・・といふと例の妖怪め、が、實はその肴屋で喧嘩をして居たのが、たうとう擲り合ひを始めたのである。けれども私は、なぜその時其處まで出て来たか分らぬ。唯何となく出なければならぬやうな氣がして出て来たが・・・と思ふと、何だか誘ひ出されたやうな氣がしてならなかつた。今でもそんな心持がして居る。けれども、それは斷片的に頭に印象されて居るばかりで、まだどうとも纏まりがつかない。實はその時、丁度横町の角でひどく別嬪に出逢ふといふ段でゞもあつて呉ればよかつたが

といふやうな譯であるが、それが何年かの後に、工合よく當て嵌る場合があつたら使へるだらうと思つて居る。尤も既にある書かうとする材料なり趣向

なりが極つた上で、行つて見るのは好いかも知れない。即ちもう見當がついて居るのだから、實地を見るのは都合が好いだらう。けれども私は描き出さうと思ふものを、向うへ行つてから探し出すといふやうなことはありやしない。寧ろ私は、例へば、橋を渡る人を書かうとする場合には、直接橋を歩いて行く人を見るよりも、坂を下つて行く人を見て、それから想像して調和する方が、思ふことがよく描き出される。直接橋なら橋を渡る人を見て書くと、あまりに露骨になつていけない。

で私は歩くといふことをさう面白く感じない。尤も旅行などは好きで、人の旅行記など見て居ると、自分もそれと一所になつて動いて居るやうで、はては文中にないところまで想像し、朝早く起きたり、飯を食つたりするところを自分で考へて、あまり面白くなつて、つい自分も飛び出すといふやうなこともある。(談)